『中国新女界雑誌』に見られる日本的事象

張　淑　婷

Chinese New Feminine World Magazine and the Influence of Japanese Thought

ZHANG Shuting

After suffering the devastation of the First Sino-Japanese War, Qing China began to reform itself, the aim of which was to guard against feudal control. During the process of educational reform, the success of the Japanese reforms under the Meiji government attracted the attention of a number of reform-minded Chinese. With the encouragement of the government, a growing number of Chinese began to pursue their studies abroad in Japan. This was the first time in Chinese history that Chinese women would seek an overseas education.

These women would receive an advanced education in Japan. In tandem with the increased standing of women in the Western world, the status of these women was also on the rise. An increasing number of these young women would go on to reject traditional feminine roles and would work alongside their male counterparts in a number of reform motivated projects. *Chinese New Feminine World Magazine* was established in Tokyo during this period, and its circulation ranked number one compared to the other Chinese female periodicals published prior to 1911. The magazine editors were all female and the articles were aimed at a female readership. The aim of the magazine was to explicitly promote women's issues and to raise the status of women.

In recent years, the overwhelming majority of research concerning *Chinese New Feminine World Magazine* has emphasized the sophistication of the articles relating to women's liberation. However, almost none of the secondary literature has looked at the influence of Japanese thought on the magazine. Women's education in Japan was influenced greatly by Western models of education, and these new modes of thinking greatly influenced the young female Chinese students studying in Japan at the time.

This paper analyzes the influence of Japanese thought on *Chinese New Feminine World Magazine*, and concludes that Japan did indeed exercise an enormous influence on Chinese women's education.

Keywords:『中国新女界雑誌』、日本的事象、清末留日女学生、西学東漸

はじめに

アヘン戦争が中国近代史の幕を開けると同時に、西方文明のアジア進出から、封建君主専制政治、小農自然経済及び儒教思想を中心とする伝統文化などの中国社会の諸方面において未曾有の挑戦があった。

西方の生産機械の輸入に伴い、中国の伝統的な家庭手工業は衰退し、大量の女性労働力が社会進出によって様々な職場での生産労働力として現れ、女性の社会地位を徐々に向上させてきた。一方、沿岸通商港の開放は西方宣教師の布教を推進し、平等、自由、民主などの西方資産階級学説は清末社会に大きく広まった。「夷の術を持って夷を防ぐ」[1] という悟りの影響で、中国人は積極的に西方を学び、不纏足運動、女学堂、女性向けの新聞や雑誌と女性団体などの新たな物事も清末の女性生活に出現した。国家の危機に対処する際に、改めて女子の身分や社会的役割を定義すべきだと主唱する人は次第に増えてきた。

1895年の日清戦争で清国は敗戦した。「西学を学ぶものは、東学[2] を学んだものには遠く及ばない状況である」[3] と、直接西方を手本として学ぶことより、日本から西学を習うことは「路近、文同、時短、費省」[4] の優勢でさらに当時の中国知識人に提唱された。この時期に、日本へ向かった留学生の波に乗り、中国の女性は初めて留学生として海外で近代の教育を受けることができた。日本で留学しているうちに、何千年の封建社会の礼教に束縛されたこれら清末の女性は先進的生産力、政治と文明などと接触し、特に「天賦人権」など民主自由の思潮の影響で、女子国民の意識が覚醒させ、国家の危機に瀕している時、女子留学生は男子留学生とともに、革命運動への参加、雑誌と新聞の出版と、女子組織の成立などの活動に力を傾け、ついに「女権を争い、女学を栄え」というスローガンを叫んで歴史の舞台に上った。この時期に出版された雑誌と新聞は中国に伝えられ、社会各界に強烈な反響を引き起こした。西方と日本の色彩に染まった女子教育と女性観は様々な媒介により中国に伝えられ、中国の社会に巨大で深遠な影響を与えた。

近年、20世紀初の中国女子日本留学史、中国近代女子教育、辛亥革命期中国女性参政権運動、中国女性新聞史と女性観の変化などに関する研究は徐々に注目を集めている。その中で、夏暁虹『晩清文人婦女観』、陳東原『中国婦女生活史』、顧秀莲『20世紀中国婦女運動史』、谷忠玉『中国近代女性観的演変、女子学校教育』、劉人锋『中国婦女報刊史研究』、張丽萍『報刊与文化身份』などは同領域で代表的な研究だと称される。しかし、清末留日女子学生が日本で創刊した新聞や雑誌を検討する研究の中で、西学における女性観と女子教育が中国に伝わる過程に、「従欧洲来、經過日本、再傳到中国」[5] という西学東漸の道筋に日本が果たした役割を論じたものはあまりない。

そこで、本研究は、清末における中国留日女子新聞の中で、当時大きく影響力を持ち、「女界門界大王」と称される『中国新女界雑誌』を対象に、女性の独立という意識の覚醒、女権の獲得という呼びかけ、西方資産階級思想の伝播などの視点から同雑誌を分析するのではなく、同雑誌を創刊した背景に着眼して、同雑誌に掲載された内容を考察した上で、中国女子留学生主編者達が日本へ留学した際に、どのようにその知識を生かしたかを分析し、近代女子教育や女子解放思想を彼女たちが如何にして中国に

1）原文は中国語で「師夷長技以制夷」、清時代の思想家魏源が『海国図志』で提出したもので、「西方の先進技術を学んでから西方列強を抵抗する」という意味合いである。

2）ここの東は、当時、日本を指すもので、日本から学ばれる知識は東学と言い、日本語は東語と言う。

3）内田慶市『ヨーロッパ発-日本経由-中国行き』、1997年４月、『浙江と日本』（関西大学東西学術研際共同研究シリー１、関西大学東西学術研究所）第189頁。

4）舒新城『近代中国留学史』上海：上海文化出版社、1989年、第46-47頁。

5）内田慶市『关于“西学東漸”与近代中日欧言語接触的研究方法』、『中国学志・否号』、1998年２月、第25頁。

伝達したかを論ずることで、西学東漸の「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という道筋における日本が果たした役割をも明らかにする。

一、明治時期における日本の女子教育の発展

日中両国の近代史を比べると、両者とも国門がやむなく開かれた歴史があり、深刻な民族危機に向かって日本は明治維新を取り、社会の各方面から変革した。この時期、日本は欧米の政治、政体、軍事、経済、教育など様々な方面から積極的に学んでいた。明治政府は近代教育システムを設立する際に、「富国強兵」という改革の方針に基づき、母親がある程度の知識素養を持つかどうかは子や孫を立派な人材に育成させることと緊密な関係があると認識し、女子教育の発展に取り掛かり始めた。1872年、日本政府は近代における初めての教育法令『学制』を頒布した。

> 華士族農工商及女子必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す（中略）高上の学に至ては其人の材能に任かすといへども幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものは其父兄の越度たるべき事[6)]

と書いているように、男女児童が平等に教育を受けることを規範とした。これを皮切りにして、文部省は欧米に女子留学生を派遣し、国立、公立の女子学校を設置する政策を実施し、日本の女子教育は軌道に乗った。この時期に、欧米女子教育を模倣し、子孫の家庭教育が担当でき、一定の科学知識を身につけるような女性を求めることを目標とした教育は欧化女子教育と言われる。

しかし、欧化女子教育は長くは続かなかった。元田永孚を代表とする保守派の勢力が台頭したことにより、彼らは西洋の文明開化を重んずる一方で、従来の儒家倫理、仁義忠孝の道徳と言う「義」が軽視され、君臣父子の三綱五常が廃る風習が生じるかもしれないと欧化女子教育を批判した。

1879年、保守派は天皇の許可を得て『教育聖旨大旨』[7)]を公布した。天皇名義の影響で、孔子を代表とする儒家倫理の道徳教育が改めて提唱され、『改正教育令』、『小学校令』『中学校設置』も相次いで推出された。『学制百年資料篇』[8)]の資料から、この時期に公布された法令に欧化女子教育時期で主張した男女共学と対立した規定が多く出ていたことがわかる。例えば1882年の『中学校設置』には、普通中学校

6）『学制・第二百十四号』、学制100年編集委員会、www.next.go.jp。

7）『教学聖旨大旨』（明治十二年、1888年）「教学ノ要仁義忠孝ヲ明カニシテ智識才藝ヲ究メ以テ人道ヲ盡スハ我祖訓國典ノ大旨上 下一般ノ教トスル所ナリ然ルニ輓近専ラ智識才藝ノミヲ尚トヒ文明開化ノ末ニ馳セ品行ヲ破り風俗ヲ傷フ者少ナカラス然 ル所以ノ者ハ維新ノ始首トシテ陋習ヲ破り知識ヲ世界ニ廣ムルノ卓見ヲ以テ一時西洋ノ所長ヲ取り日新ノ效ヲ奏スト難ト モ其流弊仁義忠孝ヲ後ニシ徒ニ洋風是競フニ於テハ將來ノ恐ルル所終ニ君臣父子ノ大義ヲ知ラサルニ至ランモ測ル可カラ ス是我邦教学ノ本意ニ非サル也故ニ自今以往祖宗ノ訓典ニ基ヅキ専ラ仁義忠孝ヲ明カニシ道徳ノ学ハ孔子ヲ主トシテ人々 誠實品行ヲ尚トヒ然ル上各科ノ学ハ其才器ニ隨テ益々畏長シ道徳才藝本末全備シテ大中至正ノ教学天下ニ布満セシメハ我 邦獨立ノ精紳ニ於テ宇内ニ恥ルコト無カル可シ」

8）同6）。

は女子生徒を受け入れないという男女の差別教育の規定が定められていた。そのほか、女子学校教育の内容も、算数、習字、単語などの実学を重んずるものではなく、道徳修身の教育が重視されていた。

儒学を復古する道徳の教育は1895年日清戦争の勝利で転機を迎えた。日清戦争までに教育の普及は日本が清国に勝ったことで保障を与えたと当時の人々が考えた。そして、清国から巨額な賠償金をもらい、日本政府は教育の規模をさらに拡大した。同時期、日本で国家主義思想が次第に現れ、国家利益を守る視点から女子教育の重要性を論ずる主張も日々増加し、女子教育は急速に発展する段階に入ってきた。明治32年、日本政府は『高等女学校令』を頒布し、良妻賢母の女子教育を確立したことを示した。この時期の女子教育は、明治前期に女性に知識素養を身につけさせるような欧化的賢母観と、明治中期に復古した伝統的な儒家女徳を重んじる保守的女子教育観とを融合し、最後に国家利益に奉仕する女性を育てることを目指した。

ところが、中国が日本を模倣したのはちょうどこの時期で、女子は留学生として官費、また私費で日本に大勢渡ってきた。これらの女子留学生は当時専ら清国留学生向けの教育機関で新たな形の教育を受け、それら身につけた事を中国の女界に広く伝播し、かつ彼女達の努力で中国の女界に巨大な影響を与えた。

二、清末女子の日本留学

歴史上、中国人留学の発端は洋務運動であった。しかし、当時の留学生は全員一様で欧米に留学する男子であった。中国の女性が留学生として現れたのは日清戦争後で、それは主に日本への留学であった。理由は以下のように述べる。

まず、中国の伝統的な家庭手工業から束縛を解かれた女性たちは、社会進出によって様々な職場での生産労働力として現れ、女性の社会地位を徐々に向上させてきた。一方、沿岸通商港の開放は西方宣教師の布教に便宜をもたらし、平等、自由、民主などの西方資産階級学説は清末社会に勢いよく吹き込まれてきた。「夷の術を持って夷を防ぐ」という悟りの影響で、不纏足運動、女学堂、女性向けの新聞や雑誌と女性団体など新たな物事が清末の女性生活に出現した。深刻な民族危機に瀕した際に、改めて女子の身分や社会役割を定義すべきだと主張する人は徐々に増えてきた。日本への留学は西洋よりは「路近、文同、時短、費省」と優れており、さらに清政府も日本への留学を推奨した。一方、日本は中国で親日の勢力を育成しようと積極的に中国人の留学生を受け入れた。また、中国資産階級維新派の知識人は中国女性が国民意識を樹立させるため、「強国保種」と唱えて女子教育を発展させるすべきだと考えた。しかし、国内の女性教育を担当できる女性教習が少なかったので、短期で女性教習を養成するために、女性に速成師範教育を習得させた。そして、女性教育がすでに中国より発達した隣国日本へ女子留学生を派遣し、女性教習を増やすことが急務となった。さらに、日本で実行された良妻賢母の女性教育は維新派が主張する「上可相夫、下可教子、近可宜家、远可善种」[9] という女性身分認知は似ているので、日本への留学はより当時の人々に納得された。

9) 梁啓超『倡設女学堂启』、『梁啓超全集・第一卷』、北京出版社、1999年、第38頁。

最初に日本に来た女子留学生については、今までの資料を巡ってまだ諸説入り乱れている。実藤恵秀『中国人日本留学史』では、1901年に、最初の中国女子留学生が日本に来たと指摘した[10]。石井洋子は『辛亥革命時期の女子留日学生』で、『浙江潮』第３期付録「浙江同郷会留学東京名簿」によると、はじめの中国女子留学生は浙江省九歳の夏循蘭で、1899年に渡日し、華族学校に入学したと記述した[11]。また、周一川などの学者は、中国女子留日第一人者は浙江省出身の金雅妹だと主張した。金は、孤児で三歳の頃、アメリカ宣教師メカッチ（Dr. Mecartee）に養女として養われ、1870年前後に養父とともに渡日した。誰が先に来た留日女学生であるかについては疑問だが、『1892－1945年近代中国女性日本留学史』[12]と『中国人日本留学史』では、1905年湖南省が官費で20名の女子学生を日本に派遣したまで、日本での中国女子留学生は10名前後の規模であったことが分かった。また、実藤恵秀『中国人日本留学史』で、「最初の女子留学生は単独で来たのではなくて、父兄あるいはその夫の留学についてきたのである」[13]と述べたように、初期の女子留学生は男子の留日活動と伴って発生したので、途中に退学したことが多々あり、課程を最後まで修了した女子は一層少なかった。1905年官費女子学生を日本実践女子学校に派遣したことを皮切りにして、女子日本留学はピークを迎えた。湖南省以外、奉天女子師範学堂は1907年に21名の女子学生を実践女子学校に送り、江西省も10名の官費生を派遣した。実藤恵秀『中国人日本留学史』のデータから、1907年に139名、1908年126名、1909年149名、1910年に125名、1911年に81名の中国女子が渡日したことがわかった。20世紀初の民主革命に絶対な影響を与え、後世に名を馳せた陳撷芬、林宗素、秋瑾、燕斌、唐群英などの女性は同時期の日本留学生である。

当時中国留日女子学生が就学した教育機関について、謝長法は『清末的留日女学生』[14]で詳しく統計した。ここで、1906年から1911年まで、入校人数順番10位の学校を以下の表にまとめた。

表一　1906-1911年　中国留日女子学生の入校人数上位10校

学習学校	在校人数	学習学校	在校人数
実践女学校	39	東京高等女子師範	4
日本女子美術学校	13	東京女芸学校	4
日本女子大学	6	東京蚕業講習所	4
大成女学校	6	東京女子師範学校	3
東京女子音楽学校	6	東京女医科	3

表一のデータから、実践女学校の入校人数は絶対的な優勢で一位を占めたことがわかる。実践女学校は明治期に有名な女性教育家下田歌子に創立され、同校は社会発展に適応する実学を教育し、良妻賢母の

10）実藤恵秀『中国人日本留学史』（修訂訳本）、北京大学出版社、2012年、44頁。

11）石井洋子『辛亥革命時期の女子留日学生』『史論』、東京女子大学史学研究室、第36号、31-54頁、1983年。

12）周一川『1892－1945年近代中国女性日本留学史』、社会科学文献出版社、2007年。

13）実藤恵秀『中国人日本留学史』（増補版）くろしお出版社、1981年、第77頁。

14）謝長法『清末的留日女学生』原材料基于刘真主編、王煥琛編著『留学教育—中国留学教育史料』（第一册）、台北「国立編訳館」1980年版；佚名編『清末各省官自費留日学生姓名表』、文海出版社；『神州報』第１卷第１－３期、1907-1908年。

女性教育主義を貫くものである。1904年、清国の女子留学生を受け入れるため、下田歌子は中国人留学生支部を特設し、清国国内に女性教師を緊急に必要としていた状況を考え、『清国女子速成科規定』[15] と『日本実践女子学校附属中国女子留学生師範工芸速成科規則』で、清国女子の専門科目設置に師範速成科は修業年限２年または１年と工芸速成科は修業年限１年と定めた。その中、師範速成科は修身、教育、心理、理科、歴史、地理、算術、体操、唱歌、日語、漢文などの授業も含んでいる。

『下田歌子与中国婦女改良運動』によると、1911年まで、日本で卒業した清国の女子留学生は合わせて116名がいて、その中で94名が実践女学校の学生だ[16] と指摘されている。また、下田歌子の影響で、これらの実践女学校卒業生達は帰国してから日本の女学書籍を翻訳し、女子学校を創業し、女性新聞や雑誌の出版に尽力し、積極的に日本で把握された知識を国内の女性達に紹介した。図一は1906年『中国新女界雑誌』に収録された『丙午春留学日本実践女学校中國女学生之撮影』[17] である。



図一 『中国新女界雑誌』第３期　丙午春留学日本実践女学校中國女学生之撮影

三、清末における女子新聞や雑誌と『中国新女界雑誌』

１、清末における女子新聞の発行

各方面の資料をめぐり、中国最初に女子で上梓した女子新聞は1898年、康同薇、李蕙仙、裘毓芳など、上海で創刊した『女学報』である。同刊は康有為、梁啓超を代表した資産階級維新派の支持を受けたものである。『女学报』は資産階級維新派が西方の文明を紹介し、民主自由の思想を伝播する一つ世論の武器で、初めて女性の権利を伸張し、男女平等の旗を高く挙げた。維新変法の失敗にしたがい、『女学報』

15）実践女子学園『実践女子学園100年史』、2001年、第118頁。

16）何遠琼『下田歌子与中国婦女改良運動』、『華声』、2015年008期、湖南日報出版社。

17）『丙午春留学日本実践女学校中國女学生之撮影』、『中國新女界雑誌』第３期、1906年７月。

は廃刊となった。

1898年『女学報』の出版から1911年辛亥革命に至る10余年間に、女子新聞は顕著に発展し、中国や日本で女子を読者にする新聞は大量に現れた。表二は方漢奇『中国近代報刊史』[18]、丁守和『辛亥革命時期期刊紹介』[19]と劉人峰『中国婦女報刊史研究』[20]を参照し、整理した1898年～1911年の間に中国国内で上梓された女子新聞である。

表二　1898-1911年に中国国内で出版された女子新聞

出版地	刊名	編集者	時期
上海	『女学報』	康同薇 李仙蕙など	1898.07-1898.10
	『女学生』	上海城東女学社	1903
	『女子世界』	丁初我	1904.01-1907.01
	『中国女報』	秋瑾 陳以益など	1907.01-1907.02
	『天足会報』	沈仲礼	1907.11
	『神州女報』	陳志群	1907.12-1908.01
	『女界月刊』	曾孟朴	1907
	『新女子世界』	陳以益	1907
	『女報』	陳以益 謝震など	1909.01
	『女学生』	尹鋭志	1910.02-1912.03
	『婦人時報』	包天笑	1911.06-1917.05
広州	『嶺南女学新報』	冯活泉	1903
	『女鏡報』	郭用逮 容巧倩	1905
佛山	『女界燈学報』	何至新 李穎圓	1905.04
北京	『北京女報』	杜筠芗 張展雲	1905.08-1909.01
	『中国婦人会小雑誌』	廖太夫人	1907.03-1907.04
	『中国婦女会報』	中国婦女会	1907
	『星期女報』	善保 王淑媛	1907.07-1907.09
武昌	『湖北女学日報』	冯德生	1908
香港	『女界（婦女）星期録』	洪舜英	1910
天津	『中国婦女改良会報』	英淑仲	1911

一方、石井洋子『辛亥革命期の留日女子学生』[21]により、当時留日女子学生が創刊した雑誌は表三にまとめたように、７種類がある。同時期の国内の規模と比較すると、数は少ないが、当時女子留日学生は男子留日学生の40分の１を占めた。ところが女性で上梓した新聞の数はおよそ男性が主編した新聞の10分の１を占め、この数から見れば、当時留日女子学生の新聞と雑誌の活動規模は無視することはできないであろう。

18）方漢奇『中国近代報刊史』、山西教育出版社、1991年。

19）丁守和『辛亥革命時期期刊紹介』（第二集）人民出版社、1982年。

20）劉人峰『中国婦女報刊史研究』、中国社会科学出版社、2012年。

21）石井洋子『辛亥革命期の留日女子学生』、『史論』、東京女子大学史学研究室、第36号、31-54頁、1983年３月。

表三　1898－1911年に創刊された女子新聞[22)]

出版地	刊名	編集者	時期
東京	女報（女学報）	陳撷芬	1902.05-1903.11
	白話報	秋瑾	1904.09
	女子魂	抱真女士（潘朴）	1904
	中国新女界雑誌	煉石女士（燕斌）	1907.02-1907.07
	二十世紀之中国女子	恨海女士（田桐）	1907
	天義報	何震 刘師培	1907.06-1908.03
	留日女学会雑誌	唐群英	1911.04

本稿は『中国新女界雑誌』を選んで分析する理由は以下のようにある。

まず、各新聞と雑誌の創刊時期から見ると、『女学報』は元々陳撷芬が上海で作った新聞であり、1903年「蘇報案」が発生、陳撷芬は父親陳範とともに日本に流亡した間に、日本で一期の『女学報』を続けて出した。秋瑾の『白話報』は「清国留日学生演説練習會」の機関雑誌として、毎回の練習会で演説した原稿を整理し編集したものである。抱真女士の『女子魂』は第三者の歌で語る方法で、当時中国社会に発生した女性達に関する愛憎や情念の不幸を題材として描いた「改良女子歌本」である。『中国新女界雑誌』を前の三つの新聞と雑誌を比較してみると、編集者から、内容、趣旨、読者に至るまでを加味するならば、『中国新女界雑誌』はまさに清末に海外初で創刊された女性新聞だと言っても過言ではないであろう。

また、『中国新女界雑誌』は中国女子新聞史において非常に重要な位置に付けられたものである。談社英が編著した『中国婦女運動通史』で、「中国新女界杂志出版時期、亦不甚久、惟其質的方面、則頗與女学報、中国女報、及神州女報等、有同样之價值也」[23)]と『中国新女界雑誌』は価値があることを評価した。中国新聞史に最も貢献した陳志群は自分が主編した『神州女報』の発刊詞で『中国新女界雑誌』、『天義報』と『中国女報』三つの新聞は当時中国女子新聞界で「鼎の三足」のように鼎立した状況を述べた[24)]。それを踏まえれば、『中国新女界雑誌』の地位は明白であろう。

後世の好評を博しただけではなく、当時の同雑誌の発行量の規模からも『中国新女界雑誌』の影響力が推測できる。『中国新女界雑誌』は元々月刊で東京に創刊したものだが、日本だけで販売したのみならず、『本雑誌國内各代派所公鉴』[25)]により、同誌は国内19省68地域でも代理販売点を設置した。第３期までの売り上げはすでに５千部以上に達成し[26)]、同時期に発行していた新聞の販売数の中で１位を占めた。同雑誌が発行されてから、日本と中国の女性達の中で強烈な反響も引き起こした。第４期震懦『讀新女界雑誌書後兼贈炼石女士』に「欧美文明唱自由、中原豪气久沉浮。辛勤賴有女娲石、次第流輸貫九州」と陳述し、主編者が『中国新女界雑誌』を通じ、久しく見聞がふさがっていた国内に欧米文明を輸入す

22）この表は石井洋子『辛亥革命期の留日女子学生』に基づいて作られたものである。『史論』東京女子大学史学研究室、1983年、第36号。

23）談社英『中国婦女運動通史』、商務印書館、1937年、第14頁。

24）『神州女報發刊詞』、『神州女報』第一巻第一号、1907年12月。

25）『本雑誌國内各代派所公鑑』、『中国新女界雑誌』第５期、1907年６月。

26）『本社特別廣告』、『中国新女界雑誌』第４期、1907年５月。

ることを称賛した。また、第３期幺凤『寄贈中国新女界雑誌主筆炼石女士』、武陵退庐『讀中国新女界雑誌後二律寄贈炼石女士』、第６期醉白『讀新女界雑誌賦八绝句贈炼石女士』と顾彤光女士『讀新女界雑誌書後寄贈炼石女士』などの投稿から同雑誌が外国女界の新動態を中国への輸入に積極的な役割を果たしたことを肯定し、西方の学説、あるいは西学の東への遷移を促進したことがわかる。その他、今に至るまでに、表三に載せた七種類の資料を収集する際に、『中国新女界雑誌』は全て公開されたデータベースから最も完全に揃えられた雑誌である。以上の理由を含め、近代中国女子新聞と雑誌を研究資料として西学東漸の過程に日本が果たした役割を検討する際に、『中国新女界雑誌』を選択し分析する。

２、『中国新女界雑誌』について

1900年、八国連合軍は義和団鎮圧の名目で、北京を陥落させ、この戦争で中国は完全に半植民地半封建社会になった。中国では民族危機が非常に深刻で、社会各階級の矛盾は急速に激化し、民主革命の炎が凄まじく上がった。1905年、中国同盟会は東京で成立を宣言し、中国民主革命は新たな紀元に踏んだことを示した。資産階級革命派は康有為と梁啓超を代表とする資産階級改良派との論争に、有利な位置を占めるために、孫中山を中心とする資産階級革命人物は次々と新聞を創刊し、革命思想を宣伝していた。『中国新女界雑誌』はこの論戦における革命派の産物の一つである。

1907年２月５日、『中国新女界雑誌』は東京で創刊され、中国同盟会河南支部が主催し、総責任者は中国同盟会河南支部長朱炳麟で、主編は河南女子留学生燕斌、劉青霞である。

主編及び主筆の燕斌に関する記録はそれほど多く見つからなかったが、『中国新女界雑誌』第１期『論女界醫學之關係』で、「篠瀨君與斌同學醫於日京早稻田同仁醫院…」[27] から、燕斌は当時早稲田大学で医学を専攻したことが分かる。また、第３期『中国婦人会章程』で「本社總經理燕斌女士素精醫学、廖太夫人之高足弟也。近按来函、得悉廖太夫人現由沪返京、将从事於女界實業之經營且嘱運動在東會員、組織東瀛分會」[28] と述べ、燕斌は廖太夫人[29] の元で医学を勉強した経験があり、彼女は中国婦人会とは密接な関係があることが推測できる。さらに、第５期燕斌『羅瑛女士傳』で、「吾有生三十九年…」[30] により、第５期を出版する1907年に燕斌が39歳で、燕斌は1868年生まれのことが推測できる。この文の後ろに、羅瑛と燕斌は同級生という記述があり、燕斌は粤西の出



図二　『中国新女界雑誌』第四期　表紙

27）篠瀨『論女界醫學之關係』、『中国新女界雑誌』第１期、1907年２月。

28）『中國婦人會章程』、『中国新女界雑誌』第３期、1907年４月。

29）廖太夫人：本名邱彬忻である。嘗て日本で医者の仕事に携わり、その後北京で京師女学衛生医院を創設し、中国婦人会の設立者としてチャリティー活動をよく組織した。参考文献、刘宁元『中国婦人会与北京女界賑災』、北京社会科学、2009年第４期。

30）『羅瑛女士傳』、『中国新女界雑誌』第５期、1907年６月。

身である可能性が高いと思われる。燕斌は「炼石女士」という筆名で、『中国新女界雑誌』の各期で発表した文章は半分ほどの比率を占めた。他の主筆は、発表する文章の数で並べると、媧魂、佛群、轉坤、灼華、懷馨などの留日女子学生がいたが、彼女たちに関する資料は燕斌より少ないため、今後の課題としてより詳細な資料を発見しようと考える。

『中国新女界雑誌』は合わせて６期あり、全刊の投稿は当時の留日女子学生が書いたものである。最初に論著、演説、訳述、史伝、記載、文芸、談叢、時評、小説、雑纂など10個の欄を設けた。発行第１期で読者の反応により、第２期から文章の白話を10の６、７まで増した。投稿は「論著專取文言、演説專取白話」[31]の形で、内容が平明で理解しやすいから、読者から非常に好評を博した。しかし、第６期『婦女實行革命、應以暗殺為手段』という過激な文章を載せたため、日本の警察に出版禁止と命じられ、廃刊となった。

四、『中国新女界雑誌』に見られる日本の女子教育

１、「女子国民」という女性身分への希望

1907年第２期『本報五大主義演説』で、「一、發明關於最新学說；二、輸入各國女界新文明；三、提倡道德、鼓吹教育；四、破舊沉迷、开新社会；五、結合感情、表彰幽遺」[32]と、燕斌は『中国新女界雑誌』を編集する５つの方針を定めた。また、同報の編集理由、あるいは編集の動機は雑誌の『発刊詞』[33]から窺える。燕斌は欧米各国は女界が人数の半分を占めることをよく知り、女性は男性と同じく平等な教育を受け、女国民も国家建設の力になれるからこそ、国家は富強を実現していくと指摘した。中国は数千年以来、女子の徳は才のないことだという古いしきたりに拘ったから、国家危機に瀕している状況に立ち、「中國雖有多數女國民之形質。而無多數女國民之精神。則有民等於無民。」と一言で中国の女界の困境を推測した。さらに、この局面を改善するには、「必發揮其新道德而活潑新思想。斯教育一女子。即國家真得一女國民。」と対策を提言した。すると10年後で中国女界は必ず欧米の女子教育に匹敵することができると述べた。第１期『本報対于女子國民捐之演說』で、燕斌が

> 本社最崇拜的就是女子國民四个大字。本社創办雑誌的宗旨雖有五條、其実也只是这四个大字。本社新女界雑誌从第一期以后、無論出多少期、辦多少年、做多少文字、也只是反復解説这四个大字[34]。

と強調し、中国女性達を国家の利益に奉仕する「女子国民」として養成することは、この時期に日本で提唱した国家主義指導の下で女子国民を教育する思想はお互いに呼応した。燕斌の『女界与國家之関

31）『社章録要』、『中国新女界雑誌』第２期、1907年３月。
32）『本報五大主義演説』、『中国新女界雑誌』第２期、1907年３月。
33）煉石『發刊詞』、『中国新女界雑誌』第１期、1907年２月、第１－３頁。
34）『本報關於女子國民捐之演說』、『中国新女界雑誌』第１期、1907年２月。

係』[35] で、女界と国家の関係を論証し、国民の半分を占める女性は子孫を育成する使命を負うから、国家や民族の盛衰とは密接な関係があることを強調した。燕斌にしてみれば、西方進化論の言い方で、女性解放は国家の開化、文明の程度、民族の運命を決めるので、全ての国家は女界を重視すべきであると述べている、さらに「故論女子之時代其國家之密切關係者、就普通論之当以教育為急。惟在吾中國則尤以天足為先」、主編は欧米と日本の女界が発展する軌道を参照し、欧米と日本は両方とも女子教育に力を尽くすのは急務だという措置を取った。しかし、普遍的な方法論を見出して特殊性も検討する必要があるように、欧米、日本と違い、中国は古来から纏足の旧弊は根強く揺るぎないため、中国の女性に閨房から新式な教育を受けさせることより、体の解放を先にさせるべきで、纏足を解けることは目下でしなければならないことになる。この点から、雑誌の主編は中国の国情に立ち、自国なりの見解が垣間見えると思う。

『中国新女界雑誌』で、西方の資産階級学説を宣伝した投稿はかなり多く見かけた。例えば、『女権評議』[36] で、西方資産階級思想「天賦の人権」を用い、男女平等の合理性を肯定した。『中国婚俗五大弊説』[37] で、「包辦婚姻」により相方の相性が会わない可能性が高いため、かなり婚姻の悲劇を導くことになると筆者は考え、最後に婚姻の自由を主張した。また、燕斌は早婚で結合する男女は発育はまだ不健全で、「國民之生殖力、發展力、亦以俱形其薄弱者」ので、「中歐人种日劣之大原」と、中国で早婚制度は後代の弱い体質になる原因であることを批判した。『婦人問題之古來觀念及最近學說』[38] で、「婦女有同一生人之身体、同有感覚、同有欲望、同有悟性、同有感情、何得謂男女不應施同等之教育」と、女子教育の必要性を説き、「女の徳は才のないこと」を反対し、中国の伝統にある「女人学也无用」という観念は、女性は学習しないからこそ、不器用になると論述した。このような同誌における女権の必要性の主張や女性解放の進歩的意義から討論する先行研究は相当の数量で山ほど見つけられるが、ここでは触れない。

2、日本女子教育からの啓発

『中国新女界雑誌』で日本における国家主義概念の「女子国民」という教育理念を参照した以外、同雑誌で日本の女子教育体制や女子学校教育内容も活用して紹介した。

第 2 期『恭賀新年』で、

> 講國民教育、就要講家庭教育、講家庭教育就要講女子教育。这叫做基礎之基礎、根本之根本（中略）却没看見普通女子教育有个动静儿。若是學部頒个定章。各省府州县的初等小學堂男女一例受學、再定个強迫的法律、男子女子以若干歳為學齢。违者罰其父母。这么样就女子教育、有个萌芽了[39]。

35）燕斌『女界与國家之关系』、『中国新女界雑誌』第 2 期、1907年 3 月。
36）燕斌『女権評議』、『中国新女界雑誌』第 1 期、1907年 2 月。
37）燕斌『中國婚俗五大弊説』、『中国新女界雑誌』第 3 期、1907年 4 月。
38）忏碧『婦人問題之古来観念及最近學説』、『中国新女界雑誌』第 5 期、1907年 6 月。
39）木蘭同郷『恭賀新年』、『中国新女界雑誌』第 2 期、1907年 4 月。

と書き、作者木蘭同郷が中国女界でまだ発足していなかった女子学校教育を定めようとした。「男女一例受學」と男女生徒の学齢を定めた発想は、作者木蘭同郷は日本政府が1872年に頒布した日本近代最初の教育法規『学制』から影響を受けたことが推測できる。『留日女学界近日事』[40]、日本の代表性がある成女学校を選び、詳細的に成女学校の授業内容、入学及び卒業の条件、寄宿の状況、学費などを紹介し、主編者は国内の女性達が自ら平等な新式的教育を受けさせるように日本へ留学することを呼びかけた。

表四　第１－６期に各欄の設置一覧

	欄
第一期	図画　発刊詞　論著　演説　譯述　記載　文藝　談叢　時評　小説
第二期	図画　発刊詞　論著　演説　史傳　記載　文藝　談叢　時評　小説
第三期	図画　論前　論著　演説　譯述　史傳　記載　文藝　談叢　時評　小説　専件
第四期	図画　文論　演説　傳記　家庭　教育界　女藝界　通俗科学　衛生顧問　文芸　小説　附録短篇小説
第五期	図画　文論　演説　傳記　家庭　教育界　女藝界　通俗科学　衛生顧問　文芸　時評　談叢　小説珍聞
第六期	図画　文論　演説　傳記　家庭　教育界　女藝界　通俗科学　衛生顧問　文芸一　文芸二　小説

表四は『中国新女界雑誌』に設置した全ての欄の一覧で、第４期から大きな調整があったことがわかる。その原因について、燕斌が『本報五大主义演说』で以下のように説明した。

> 本社自第一期雑誌発行以来。叠奉内地女志士来函。皆是賛成。极蒙奬勵。但是信後。多半皆帯一段告誡的話、大致説到、第一通俗体文。宜居十之六七。第二不宜全恃空論。當於家政、生理、衛生、教育、手藝、科学等门。一同注重、則于内地女学界、有實在的益處自然無不歓迎的了（中略）賛成这个办法的竟居多数、所以勉強从衆命、决計从第四期起、以後每期改為、時論、社説、家庭、傳記、教育界、女藝界、通俗科学、衛生顧問、書札、文苑、小説等十一门。（中略）如此辦法、可算真正實行这第二條主義了[41]。

と、読者達の要求に応じて編集部が第４期から実学の内容を増加することと決めた。また、この調整で燕斌は雑誌の第二条主義、すなわち「各國女界の新文明を輸入する主義」をまさに実現できると考えた。ここで、内地の女界に好まれた「實在的益处」とはいったい何だろうか。

表五にまとめた新設する内容を観察すると、家政学、造花術、化学、生理衛生など、当時日本女子学校の教科書を導入したことが分かる。例えば、第４期から第６期まで連載していた『家政学講義』、作者剣雲が文章の冒頭に、「这部講義、是日本塚本濱子所講的、体例很好而且极容易實行。現在特意譯了出来给我们同胞姐妹们做个参考、但是原属専為日本人而做、未免有些地方不能行於他國的。所以又去找了几本别人著的書参考。斟酌把原本增減了許多、总期有益于中國女学的前途。这是我的苦心、女同胞们千万

40）『留日女学界近日事』、『中国新女界雑誌』第１・２期、1907年２、３月。

41）燕斌『本報五大主義演說』、『中国新女界雑誌』第４期、1907年５月。

表五　第４－６期に新設する欄の内容

	第四期	第五期	第六期
家庭	家政学講義	新産之児童論 家政学講義（続）	家政学講義（続）
教育界	歐美之女子教育	歐美之女子教育（続）	歐美之女子教育（続）
女芸界	造花術	造花術（続）	造花術（続）
通俗科学	夏日四厭虫之研究及退治 日用化学	日用化学（続）	日用化学（続）
衛生顧問	伝染病之部	公衆衛生	児病一夕話

见諒罢」[42] と、塚本濱子が書いた家政学、すなわち1906年に出版された『実践家政学講義』で、翌年に清国留学生从琯珠が中国語版『新編家事教科書』に翻訳し、燕斌は『新編家事教科書』に序言を書き、かつ中国新女界雑誌社から出版した。燕斌の序言[43] から、底本とする塚本濱子の『実践家政学講義』は日本高等女学校の家事教科書であることがわかっており、燕斌もこの訳本が伝播されていることにより、「公諸君同胞愿共精研而実行之、則和多数之幸福家庭以産出健全之国家」という美しい願望を託した。剣雲女士が『中国新女界雑誌』に発表した『家政学講義』は、燕斌と从琯珠が期待することと同じく、『家政学』を伝播されることを通じ、中国女性達に、幸福の家庭を営む知識を身につけさせ、女性が健康な子孫を育てることができるようにした。また、女性の国民意識を樹立させ、続いて秩序があり発展の気運に満ちている国家を築くことを祈っていた。



図三　『造花術』　桜花の解剖

家政学のみならず、「女藝界」の欄に載せた『造花術』、灼華女士が日本梶小彬氏の著本を翻訳したもので、緒言に「造花為女工之一種。日本女子技藝学校及美術學校均設有専科……」[44] から、「造花」は日本「生け花」を指す可能性があると推測する。同文では、「造花」用の素材、道具、染色も詳しく紹介し、「美濃紙」、「黒拉銘」、「華氏寒暑表」などの新たな単語も導入した。訳者は中国女性に日本の生け花の知識を紹介することにより、中国女性の見聞を拡大させるのみならず、中国女性達の手仕事の腕を向上させ、女子の社会地位も高めることを目指した。右側の図三は、第四期の連載で素材を紹介するのに桜の花を細かく解剖し説明したものである。

その上、編集長燕斌は早稲田大学医学部の出身で、西方科学知識を普及する際に医学知識の導入を主張した。「通俗科学」の欄に、当時日本に規定された９種類のよくある伝染病及び予防する方法を紹介した。また、『公衆衛生』で日本各地ではすでに普遍的に衛生局を設置した状況を述べ、よって中国の状況

42）剣云『家政学講義』、『中国新女界雑誌』第４・５・６期、1907年。
43）从琯珠『新編家事教科書・燕斌序』、1906年11月10日、第３頁。
44）灼華女士『造花術』、『中国新女界雑誌』第４期、1907年５月。

を反省し、日本を模倣して政府も公衆の衛生局を設置すべき、さらに中国国民もできるだけ早く生活によくある疾病に関する常識や衛生意識を身につけようと呼びかけた。

この一連の文章は、中国女性の生活とより関係がある実用的な知識を輸入し、日本を手本として西方の思想や科学を伝播し、当時の中国女性に見聞を充実させ、科学啓蒙の役割を果たした。

3、西方各国における女界動態及び女傑伝記の翻訳

明治初期、欧化女子教育を提唱し、欧米の女性模範を翻訳する「婦人立身」の読物が大量に日本で現れ、日本の女性達で知識を持ち自立という賢母のイメージを樹立させることに一役買った。20世紀前後、中国人留学生が日本に大勢きた。彼らが日本で出版した書籍を数多く翻訳し、その中に欧米女子の伝記を紹介した様々な題材の作品も訳書の波に挟まれ、中国に伝わった。例えば、『世界十二女傑』、『泰西名婦伝』、『婦人立志篇』などである。梁啓超はかつて「中國之新民」という筆名で、『新民叢報』で『近代第一女傑罗兰夫人伝』を発表した。また、「蘇報案」後、日本で流亡した陳撷芬も続いて出版した『女学報』に『世界十女傑演義』を載せた。この時期に、日本を模倣した様子が捉えることができるであろう。燕斌は日本女界の発展する歴史を反省し、彼女にしてみれば、明治維新前後、日本の見識がある人々は欧米を訪問した際、女界と国家富強の関係を悟り、女学を提唱するため、たゆまず西方の女学に関する書籍を日本語に翻訳し、それが日本の各地に伝わり、徐々に西方の女界文明を輸入した。「即此看来、我们中國女界若要振興起来、也必将顺着这个道儿（中略）就覚得世界上的事情、原来如此、女界的責任、女界的權力原来如彼（中略）自然皆生出一段、進取的気象、自強獨立的志趣。斷斷不甘居人後、那就可以漸漸興旺了」[45] と燕斌が主張し、編集者が積極的に日本の書籍を翻訳して国内の女界に伝わることより、西方開化文明を伝播する意図を推測できるだろう。

表六　女傑伝記一覧

	タイトル	日本語版	出典
第一期	創設萬國紅十字看護婦隊者	ナイチンゲール・看護婦	『歐米女子立身伝』
	奈挺格爾夫人傳		
	美國大新聞家阿索里女士傳	オソリー・新聞記者	『歐米女子立身伝』
第二期	美國大教育家梨痕女士傳	リオン・教育家	『歐米女子立身伝』
第三期	法國救亡女傑若安傳	惹安达克・軍事家	『惹安达克』
第四期	大演說家黎佛玛女史傳	リバモーア・演説家	『歐米女子立身伝』
	英國小說家爰里阿脫女士傳	アリオット・小説家	『歐米女子立身伝』
第五期	博愛主義實行家墨德女士傳	モット・講演家	『歐米女子立身伝』
第六期	俄國女外交家那批俾可甫夫人傳	ノヴィコフ・外交家	『世界古今名婦鑑』
	法國新聞界之女王亚丹夫人傳	アダム・新聞家	『世界古今名婦鑑』

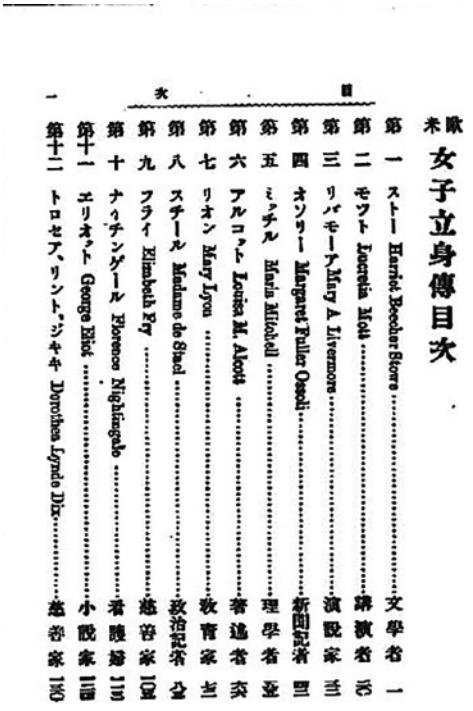
訳書の内容と形式から見ると『中国新女界雑誌』で、女傑の伝記を翻訳する投稿と各国女界の動態を紹介する投稿の二つの方面から中国女界に「女子国民」を樹立させたことを導いた。

6期の中で、国外女傑を紹介する投稿は合計9部ある。夏暁虹の『晚清女报中的西方女杰——明治“妇

45）燕斌『本報五大主義演說』、『中国新女界雑誌』第3期、1907年4月。

人立志”读物的中国之旅——』[46] にすでにこの９部の日本語版に対応する底本を整えた。これに基づき、表六にまとめた。

婦人伝記から上記の９篇を選択したことにより、主編の意図は明確に示しされた。９篇のうち６篇は全て衆議院議員根本正が訳述した『欧米女子立身伝』の内容である。図四は『欧米女子立身伝』の目次の一部である。この６篇は全部原本に対応できる。第６期の２篇は1898年徳富芦花編『世界古今名婦鑑』の内容である。残り『法國救亡女傑若安傳』は文学士中内義一著『惹安达克』に、フランス女民族豪傑ジョエジャンヌ・ダルクの業績を紹介したものだ。この９篇に出てくる女性は全て欧米の出身で、職業は看護婦、新聞記者、演説家、軍事家、小説家などである。各文章を読み、作者は９人が積極的に真理と知識を追求し、自分の幸福を追求する以外に全人類の利益を獲得するには自分を犠牲にする精神を強調した。また、女子が男性に頼らず自らの職業で活躍していることも読者に伝え、最後に社会の変革と進歩に一役買った。


目次
女
歐米女子立身傳目次
第一 ストー Harriet Beecher Stowe ……文學者 一
第二 モワト Lucretia Mott ……講演者 三
第三 リバモート Mary A Livermore ……演說家 三
第四 オソリー Margaret Fuller Ossoli ……新聞記者 三
第五 ミッチル Maria Mitchell ……理學者 亞
第六 アルコット Louisa M. Alcott ……著述者 奈
第七 リオン Mary Lyon ……教育家 去
第八 スチール Madame de Staël ……政治記者 公
第九 フライ Elizabeth Fry ……慈善家 一〇二
第十 ナイチンゲール Florence Nightingale ……看護婦 一一三
第十一 エリオット George Eliot ……小說家 一一五
第十二 トロセア、リンド、ジキキ Dorothea Lynde Dix ……慈善家 一四〇

図四　根本正『欧米女子立身伝』目次

これらの題材から見ると、主編者はこれら欧米女傑の物語から刺激を受けさせ、中国の女性が勇敢に自身の価値を再認識することができ、民族危機に瀕して女子国民として国家を復興することを導きたいことが見える。

ところが、各国女界の動態を紹介するものには、『美國女界之勢力』、『澳洲婦人之勢力』、『英國婦人争選挙權彙記』、『請看俄罗斯二百年前之婦人界』、『紀美國婦人戦時之偉業』などの文章がある。これらの文章は西方の様々の領域における活躍している女性の活動や業績を紹介し、自由、平等、独立を追求する女性の姿を褒め称えることにより、中国千年の伝統に束縛された女性が国家危機に瀕した現況に対し、女性も国家富強のために、国民身分の認識、自身価値の再発見し、力を尽くすべきだと呼びかけた。転坤の『婦人待遇論』[47] は大泽岳太郎の原著を翻訳したもので、媧魂『歐美之女子教育』[48] は日本女子高等師範学校教授下田次郎著『女子教育』の一部『歐美之女子教育』を翻訳したものである。両者とも、欧米の女子教育、特にアメリカの女子初等、中等及び高等、大学教育を紹介し、女界の発達が国家の発展に有力な支持を与えることに賛成した。また、日本が明治維新後30年に欧米の女子学制を模倣したことにおいて、ある程度の成果を収めたことを肯定し、再び日本を学ぼうとアピールした。

ところが、『中国新女界雑誌』は日本の女界に提唱したものを全面的に受け入れないと主張した。燕斌が『日本婦人の政治運動』で「日本女子教育雖然普及、究其實際、因被男界限制之、故所得者僅物質上的文明、其精神教育則非女子所得」と述べ、日本の女性は参政権を求めず、男子に迎合する良妻や淑女

46）夏暁虹『晚清女報中的西方女杰——明治“婦人立志”読物的中国之旅——』、『文史哲』2012年第四期。
47）転坤『婦人待遇論』、『中国新女界雑誌』第１・２・３期、1907年。
48）媧魂『歐美之女子教育』、『中国新女界雑誌』第４・５・６期、1907年。

に満足することに限ることを批判した。それゆえ、中国女性が実学の学習は日本を模範とすべき、精神上の修養は欧米を手本とすべきだと唱えた。

おわりに

日清戦争後、中国は隣国日本から学び始め、中国の女子留日学生は閨房を出て初めて留学生として日本で活躍していた。当時、日本で実行された女子教育理念は、欧化的賢母観と、儒教的保守的女子教育思想を総合する良妻賢母であり、女子教育の目的は国家利益に奉仕する女性を育てることであった。このような女子教育思想は、中国留日女学生が主編した雑誌や新聞にも影響を与えた。『中国新女界雑誌』はこの時期に海外で創刊した中国の最初の女性雑誌である。

「女子国民」という身分構想を実現するために、主編者が日本で留学した際に接触した女子教育思想を生かし、同誌に日本の女子の教育、教科書の内容を大量に引用し、当時の中国女性に見聞を充実させ、女性独立を啓蒙させることに貢献した。また、主編者は明治期に日本が欧米の女学を学習する方式から啓発され、この道も模範し、女学に関する書籍を翻訳し、西方の女界文明を国内の女性達に紹介した。さらに、日本人が書いた欧米女傑伝記を中国語に翻訳し、「女子国民」の模範を樹立し、身分の再認識を促した。この雑誌の出版とともに、西方の思想や科学が伝播され、この後の辛亥革命で女性解放運動の展開に非常に一役買い、女性権利必要性の主張、封建の打破、革命の宣伝を推進した。

『中国新女界雑誌』の女性主編は、欧米や日本などの強国を十分に認識した上で、外来の女学に関する経験をそのまま借用したわけでは無かったが、中国の国情に相応しい道を模索していた。「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という道筋において、日本が近代中国の女子教育や女子身分の再認識は鮮明な痕迹を残した。